

<実践研究>

様々な障害児が在籍する障害児学級での生活単元学習の充実

高橋 幸子*・高橋かおり*

本校は、三原市の中心に位置しており、児童数は333名（14学級）である。知的障害児学級1学級（4名）、情緒障害児学級1学級（5名）が設置されている。

本年度はテーマを「生活単元学習の充実」とし、(1)基礎・基本の定着を図る工夫 (2)学び合い高め合う授業づくりの工夫 (3)自己評価能力を高める工夫の柱に沿って研究に取り組んだ。

「開店！みんなのばんばんばんやさん」の実践例を研究の柱に沿って考察した。単元の成果は、題材が児童の実態に即していたこと、活動が様々な方向に広がったこと、的確な支援が行えたことである。課題は、児童相互の関わりを深める教師の支援のあり方、自己評価のあり方である。

研究の成果は、児童の生活体験を広げられたこと、自ら考え、選択し、行動する意欲や態度が培われたこと、手話という共通のコミュニケーション手段の設定で児童の関わりが深まったことである。課題は、指導案の作成のし方、単元構成である。

キーワード：生活単元学習、自己評価能力、基礎基本の定着

I 学級紹介

本校は、三原市の中心に位置しており、校区内には、三原駅・三原港・市役所等があり、駅前には商店街やデパートがある。

本年度の児童数は333名（14学級）である。

障害児学級は、昭和26年（1951年）に15名で設置された。

現在は、知的障害児学級1学級（1組）、情緒障害児学級1学級（2組）が設置されている。本年度在籍児童は、1組4名（1年1名、2年2名、3年1名）、情緒障害児学級5名（2年1名、4年2名、5年1名、6年1名）で、1人を除いて校区外から通学している。

II はじめに

障害を持つ子どもたちにとって、学校は、様々な問題と直面しながらも、地域社会で共に生きることを目指しながら、主体的に生きていく力を身に付ける場である。そのためには、卒業後の進路を展望し、子どもたちの視点に立って一人ひとりのニーズを把握し、必要な支援を行う必要がある。

今日、子どもたちの教育的ニーズは多様化している。

子どもたち一人ひとりの能力や可能性を最大限に伸ばし、自立し、社会参加の基盤となる「生きる力」を培うためには、個に応じた教育を進めていく必要がある。したがって、これからの障害児教育は、自立に向けた個々の具体的ニーズに応えるものでなければならないと考える。

本学級では、自立に向けて ①基本的な生活習慣の確立に向けての支援 ②自ら考え、選択し、行動しようとする意欲や態度の育成 ③社会参加に向けて人間関係を結び広げていく力の育成を中心に取り組みを進めている。これらの取り組みが「生きる力」の育成につながるものと考え、生活単元学習を教育課程の中心に位置づけている。

昨年度は、「生活の自立をめざした学習活動の創造」をテーマに生活単元学習を中心に研究に取り組んだ。成果としては、生活の自立を目指し、個人個人の目標を立て、目標を達成するために、一人ひとりに合った支援をきめこまかく行うことで、一人ひとりが自信を持って活動に取り組むことができたことが挙げられる。課題としては、学び合う場を設定するための小グループの編成が、一人ひとりの力を出しきれるものになっていなかったことが挙げられる。

そこで、本年度のテーマを「生活単元学習の充実」とし、本学級の教育課程の中心に位置づけている生活単元学習の充実を図っていく。

生活単元学習では、子どもたちが社会の中で生活す

*広島県三原市立三原小学校

るためには何が必要かという視点から目標や内容が考えられ、子どもたちの実際の生活や興味・関心が大切にされ、個人差の大きい本学級集団にも適合し、子どもたちが積極的に活動することができる。将来のために子どもたちが困らないように行う学習という視点だけではなく、子どもたちのやりたいことを保障することを通して「今」を充実し、「今を楽しむ」連続の延長に将来があるという視点も大切にしていきたい。子どもたちが興味・関心・意欲を示し、やってみたいという欲求を起し、実行し、できたという成就感を味わい、他から認められることによって自信を持ち、次の活動への意欲につながっていくような学習活動を創っていきたい。

III 研究の柱

(1) 基礎・基本の定着を図る工夫

生活単元学習は、学習活動を教科別等に分けずに統合化し、生活化して指導する領域・教科を合わせた指導の形態である(全国知的障害養護学校長会、1999)。単元は、実際の子どもたちの生活から発展し構成する。

本学級では、生活単元学習で培う基礎・基本を、次のように捉えた。

生活単元学習で培う基礎・基本

- 1 基本的な生活習慣の確立
- 2 自ら考え、選択し、行動しようとする意欲や態度
- 3 社会参加に向けて人間関係を結び広げていく力
これらは、社会参加の基盤となる「生きる力」につながると考える。

①単元構成の工夫

年間の学習計画の作成では、年間行事や季節の行事、地域性を考慮した上で、中核となる生活単元学習をまず、組み立て、それに関連させる形で教科の学習を組んでいった。(資料参照)生活単元は、子どもの学校生活そのものを単元化したものであり、子どもたちの教育課程の中心に位置づけている。また、生活単元学習の内容をパン作り・栽培・校外学習3つの分野に分けて単元を構成した。単元を構成する際は、子どもたちが無理なく活動できるように考えて計画を立てた。また、くり返し経験を重ねていくことを大切にしている。

②個に応じた支援の工夫

社会参加の基盤となる「生きる力」を培うためには、

子どもたち一人ひとりの教育的ニーズを把握し、個に応じて必要な支援を行う必要がある。

個に応じた支援のためには、次の三点が重要である。

- 実態把握
- 個々の目標設定と支援
- 個に応じた指導案の工夫

生活単元学習の授業は、子どもの実態から発展していくものである。そのため、個々の子どもの実態についての的確に把握することが必要になる。実態把握をする際、子どもたちの生活の中での様子について、人への関わり、物への関わり、興味・関心、生活経験など多面的に把握することが大切である。この実態把握を元に、個々の実態にあった単元を設定する。

そして、その実態把握に基づいて、単元ごとに個々の目標を設定していく。目標は、その都度見直し、子どもの実態に合ったものになるようにする。また、目標を達成する際に必要な支援をきめ細かく行うことで、一人ひとりが自信を持って活動に取り組むことができるようにする。支援は、場面ごとに計画しておき、子どもたちの自立に向けての支援になるよう考えていく必要がある。

したがって、個人差の大きい本学級の子どもたちを対象にした授業では、目標・内容・方法・支援など、一人ひとりの実態に応じたものでなければならない。指導案においても、個々の子どもの目標・活動・支援を明確に示して作成する必要がある。

(2) 学び合い、高め合う授業作りの工夫

障害児学級の授業では、個に対応するために個々に合った目標設定や支援が大切である。しかし、全く別々に、孤立した形で授業に取り組んでいくわけではない。個に対応すると同時に、「学び合う」という視点も大切にしなければならない。

生活単元学習においても、集団としての共通の目標を設定し、その目標に向かって個々の子どもが生き生きと持てる力を発揮し、表現し、相互に学び合いながら主体的に取り組めるような授業の創造を目指していく。

しかし、それぞれの子どもの表現方法が異なり、相互理解が難しいこともある。そこで、本学級では、昨年度から手話を取り入れた取り組みを行なっている。初めは、難聴の児童に対する支援の一つとして取り入れたものであるが、取り組みを進めていくうちに、他の言葉を持たない児童や発語の少ない児童のコミュニケーション手段としても使用するようになり、手話が、

本学級での共通のコミュニケーション手段となっている。このように、共通のコミュニケーション手段を持つことで、児童相互関わりが深まり、学び合い高め合うことができると考える。

(3) 自己評価能力を高める工夫

一人ひとりの力を伸ばしていくためには、一人ひとりに自分の目標に即して活動を振り返り、それを次につなげていこうとする自己評価能力を育てることが必要である。しかし、本学級の児童は、自分たちの活動を振り返り、次に生かしていこうとする意識を持ちにくい実態にある。自分の活動を常に振り返る意識が持てるよう、取り組みを進めていきたい。具体的には、自己評価の視点がはっきりするような目標を立て、短い区切りで振り返る場を設定する。また、振り返りやすいように、一連の活動をパネルにまとめた物や、日程表、写真などの資料を提示する。

IV 実践例

生活単元指導案

指導者 高橋 幸子
高橋かおり

1 学年

高橋学級1組・2組 計 9名

2 日時

平成14年9月18日(水)

第1校時～第4校時(高橋学級2組教室)

3 単元

「開店!みんなのぱんぱんぱんやさん!」

～メロンパン・チョコチップパン・チーズパンをつくろう!～

4 要旨

- 食生活が多様化している現在、パンはお米と並んで私たちの生活に欠くことのできない食べ物となっている。学校給食でも、週に3回がパンの日であり、子どもたちにとっても、大変身近な食べ物である。

そんなパンを、自分たちで作ってみたり、作ったパンでお店やさんごっこをしたりすることは、「食」に関する楽しい経験であり、食生活への関心を高めることにつながっていく。そこで、「開店!みんなのぱんぱんぱんやさん!」という単元を設定し、子どもたちの楽しい「食」経験を増やしていきたいと考えた。

本学級では、昨年度からパンづくりに取り組んでいる。昨年度は、パン屋さん探し、買い物学習、調理、パン屋さんごっこなどを計画していたが、パンづくりが中心の活動となった。本年度は、継続してパンづくりに取り組んでいくと共に、昨年度十分に取り組めなかった、パン屋さん探しやパン屋さんごっこにも合わせて取り組んでいく。

このような多様な活動を通して、子どもたちは、たくさん道具や食材に触れたり、様々な人と交流し、自分たちが住んでいる地域について知ることができると思う。

- 本学級の子どもたちは、パンづくりが大好きで、昨年の秋から1～2ヶ月に1回のペースでパンづくりをしてきた。昨年度6回、今年度4回行なう中で、回を追うごとに、見通しをもち自信をもって、作業ができるようになってきている。そして、何度も作る中で、それまで食べようとしなかったパンが食べられるようになったり、作業に意欲的になったりしてきた子どももいる。成形の時に好きな形を考えて楽しく作ったり、作業の順番を全部覚えたりする子どもも出てきた。途中で、転入・入学してきた子どもたちも、活動に入りやすく、すぐ馴染んで作業をすることができている。

本学級の子どもたちのパン作り、コミュニケーションに関する実態と課題は次の通りである。

児童	実 態
A	パン作りの経験は4回で、友だちの様子を見ながら進んでパン作りにとりくむことができる。しかし、一つの作業に集中して取り組みにくい実態もある。 自分から発する言葉が増えているが不明瞭である。伝わりにくい場面では、身振りや手話も併用して伝えようとする姿が見られる。
B	パン作りの経験は9回で、パネルを見て作業内容を確認し、作業にとりくむことができる。しかし、一つの作業に集中して取り組みにくい実態もある。 音声言語、身振り、簡単な手話を使って自分の思いを表現している。しかし、語彙数は多くないため、音声言語で伝えきれない部分は、手話や身振りを使って伝えようとしている。

C	<p>パン作りの経験は10回で、作業内容を把握できると進んで作業に取り組むことができる。また、材料や道具などを触って弁別することが出来る。</p> <p>自分から友だちや先生に話しかけ、自分の思いを伝えようとしている。</p>
D	<p>パン作りの経験は9回で、友だちの様子を見ながら見通しの持てる作業に取り組むことができる。</p> <p>友だちや教師の声かけに、応えることができる。自分の思いを伝える際には、身振りや、簡単な手話を提示すると、それに合わせて声を出して伝えることができる。</p>
E	<p>パン作りの経験は10回で、見通しを持って作業に取り組むことができる。</p> <p>前回までのパン作りで作業の分担について、友だちに自分の思いを伝えられず、パン作りに対して意欲を持ちにくくなっている。</p>
F	<p>パン作りの経験は8回目で、作り方に見通しを持って積極的に作業に取り組むことができる。</p> <p>作業の中で自分の思いを友だちに伝えることができるが、作業の分担の話し合いには、支援が必要である。</p>
G	<p>パン作りの経験は10回で、作り方に見通しを持って進んで作業に取り組むことができる。</p> <p>友だちや教師の声かけに、指さしや簡単な手話で応えることができる。</p>
H	<p>パン作りの経験は10回目で、作り方に見通しを持っている。手が汚れることが気になるが、ビニール手袋などを使うことで作業に取り組むことができる。</p> <p>低学年の友だちを気に掛けて、やさしく声掛けをすることができる。</p>

I	<p>パン作りの経験は10回で作り方に見通しを持って取り組むことができる。</p> <p>グループの友だちを意識しながらの作業には支援が必要であるが、好きな友だちには自分から話しかけていく。</p>
---	---

- 本単元を進めるにあたっては、長期間の活動になるので、常に、「お家の人やお客さん呼んでパン屋さんごっこをしよう！」という目標の意識づけを明確にしていく。そして、今年度の3回目から、プレーンなパンだけでなく、メロンパン・チョコチップパン・チーズパンなどにも挑戦している。パンづくりに新たな種類のパンを加えて変化をもたせたり、パンに関わる絵本を読み聞かせたりして、子どもたちが継続的に意欲をもって活動できるようにしていきたい。

また、小グループでの活動を取り入れ、子ども同士が学び合う場を確保していくと共に、一人ひとりがしっかり活動できるようにしていく。

5 単元の目標

- 地域を知り、地域の人とふれあう。
- パン作りの活動を通して、食材を知ったり、道具を使う仕事にふれたりする。
- 友だちと協力して、パンを作ったりパン屋さんごっこをする。
- パンの出てくる絵本に親しむ。

6 単元計画

別紙1を参照。

7 準備物

パンの材料(小麦粉、ドライイースト、卵、バター、塩、チョコチップ、チーズ、クッキー生地)、ボール、ふるい、めん棒、計量カップ、計量スプーン、はかり、ラップ、メモボード、黒板、作り方のパネル

8 指導過程

別紙2を参照。

【別紙1】

単元計画 開店！みんなのぱんぱんぱんやさん（全97時間）

	学習活動	学習のねらい	支援と評価
第一 次	<p>パンづくり（36） （月1回・4月から1月まで） ・プレーンなパンを作ろう。 （4月～5月） ・メロンパン・チョコチップパン・チーズパンを作ろう。 （6月・7月・9月） ・ぱんぱんパン屋さんの名物パンを作ろう。 （10月～1月） ◎パン屋さんを探せ！ ～発見！名物パン～（12） ○学校の近くにあるパン屋さんを探そう。 ・パン屋さんの名物パン・おすすめパンを調べよう。 ・自分が好きなパンを買おう。</p> <p>◎ぱんぱんぱんやさんの名物パンを作ろう（12） ・自分たちの名物パンを作ろう。</p>	<p>○パンづくりに使う食材や道具の使い方に慣れ、見通しを持ってパン作りに取り組む。 ○色々なパンがあることを知り、パン作りを楽しむ。 ○パン屋さんごっこへの意欲を高め、自分たちの力でパン作りをしようとする。</p> <p>○パン屋さんを探すことを通して、学校の近くにどのような建物があるか知る。 ○地図に親しむ。 ○色々なパンがあることを知り、自分たちの名物パンを作る意欲を高める。 ○パン屋さんや、地域の人など色々な人とふれ合う機会とする。 ○お店の人とのやりとりや、買い物を経験する。</p> <p>○パン屋さんごっこで、売るパンを考え、パン屋さんごっこへの意欲を高める。</p>	<p>○パンの作り方のパネルを、常に提示し、手順が分からなくなったら、パネルを見て考えられるように声かけをする。 ○メロンパン・チョコチップパン・チーズパンの中から作りたいパンを選択できるように、実際にパンを食べて、自分の考えがもてるようにする。</p> <p>○一人ひとりに、地図を準備し、自分たちがこれから行くパン屋さんに印を付けることで、目的意識を持って地域を歩けるようにする。 ○事前にパン屋さんと連絡を取っておき、質問にわかりやすく答えてもらったり、お金を払う活動にじっくり取り組めるようにする。 ○メモボードを持参し、自分でお金を準備できるようにする。</p> <p>○今まで作ってきたパンの写真や、パン屋さんで見たパンの写真を提示し、自分の考えをもてるようにする。</p>
第二 次	<p>◎もうすぐ開店！ みんなのぱんぱんぱんやさん～パン屋さんを開く準備をしよう～（20） ○パン屋さんを見に行こう。 ○みんなのパン屋さんを作ろう。（*本時） ○みんなでパン屋さんごっこをしてみよう。 ・お店やさんや、お客さんになってみよう。</p> <p>◎いよいよ開店！みんなのぱんぱんぱんやさん！（17） ○招待状を書こう。 ○お家の人や、お世話になった人を招いてパン屋さんを開こう。</p> <p>○「開店！！みんなのぱんぱんぱんやさん！」の学習を振り返る。</p>	<p>○パン屋さんの店内には、どのような物があるか調べる。 ○自分たちのパン屋さんを開くためには、どのようなものが必要か考え、自分たちで作る。 ○お店の人は、お客さんに、どのように対応すればよいか考える。 ○買い物を体験し、買物の手順を知る。</p> <p>○必要なことをもらさず、招待状を書く。 ○みんなで協力して、パンを焼き、パン屋さんごっこをする。</p> <p>○自分のがんばったこと、友だちのがんばったことを認め合う。</p>	<p>○教師の劇により問題場面提示を行い、「自分たちのパン屋さんを開くためには、どうすればいいか」という課題が確実につかめるようにする。 ○パン屋さん見学の際、写真を撮り、パン屋さんを開くにあたっての準備物、お店の人の対応など、子どもたちが具体的にイメージできるように、写真などを提示する。</p> <p>○教師の劇により問題場面提示を行い、「招待状には、何を書けばいいか」という課題が確実につかめるようにする。</p> <p>○今までの活動をパネルにした物や、写真を見せることによって、活動を振り返ることができるようになる。</p>

*評価は個人の目標に沿って行う。

V 研究の柱に関わる考察

パン作りの実践例を研究の柱に沿って考察していく。

(1) 基礎・基本の定着を図る工夫

①単元構成の工夫

本単元「開店！みんなのぱんぱんぱんやさん！」は、昨年度から取り組んでいる単元である。単元の中で、毎月1回のパン作りを計画し、8回のプレーンなパン作り、2回のバリエーションをつけたパン作り（チョコチップパン・チーズパン・メロンパン）を経て、今回の11回目のパン作りとなった。10回目までのパン作りは、2名の教師、5名の介助員が個に応じてきめ細かな支援を行ってきた。この繰り返しの中で、子どもたちは少しずつ自分たちだけで作業ができるようになってきた。そこで今回の11回目のパン作りは介助員の支援なしで、パン作りに取り組んでみた。

パン作りの前に、子どもたちに「今回のパン作りは、先生たちは手伝いません。みんなの力だけで作ろうね。」と告げると、子どもたちは、「やったー!!」と喜んだ。この言葉通り、子どもたちは自信を持って作業に取り組み、最後まで教師や介助員に頼ることなく、自分たちでパン作りをやりきることができた。詳しくは(2)学び合い高め合う授業作りの工夫で述べることにする。

このように、単元を構成する際に、繰り返し経験を重ねることができるようになることは、子どもたちが自ら考え行動することに大変有効であると考えている。

また、本単元は長期の単元であり、子どもたちの意欲を持続させるために、チョコチップパン・チーズパン・メロンパンなどのバリエーションをつけた。このことは、今まで積み重ねた力を発揮すると共に新たな課題を見つけることになり、大変有効であったと考える。

②個に応じた支援の工夫

○教材・教具の工夫

個に応じた支援として、パンの作り方の流れをまとめたパネル作成が挙げられる。

このパネルは、パンの作り方や順番を、把握しやすいように「ぼくのパン わたしのパン」（福音館書店）という絵本を元に作成して提示した物である。このパネルを初めてのパン作りからずっと継続して使っている。パン作りの途中、子どもたちが次に何をしたらいいのか分からなくなった時は、パネルを

見に行くように声をかけていった。子どもたちは、このパネルを見ることで、必要な道具、パンの作り方、順番などの情報を得てパン作りに見通しを持って取り組むことができた。

初めは、絵だけのパネルだったが、子どもたちと話し合って、説明の文を加えていったり、自分たちのパン作りの写真を貼り付けていったりしていった。絵・写真・文字など様々な情報を合わせて提示していったため、子どもたちは自分に合った情報を得ることができた。

今回のパン作りを、子どもたちの力だけで見通しを持ってやりきることができたのは、このパネルを活用することで自分に必要な情報を自分なりの方法で適切に得ることができたからであると考えている。

このように、今後も、個に応じた支援といっても全く別々の教材・教具を提示すると考えるのではなく、一つの教材教具をそれぞれの子どもに合った方法で活用できるようにすることを大切にしていきたい。

○指導案の工夫

今回までの10回のパン作りではその都度、児童の実態を把握し、目標を設定した上で、支援のあり方について考えてきた。

今回も同様に、これまでのパン作りの様子から子どもたちの実態把握を緻密に行い、個別の目標と支援を細かく設定した。

そしてそれを元に、前回までの指導案作りの課題であった個別の支援の流れがわかる指導案作りに取り組んだ。

個に応じた支援の流れを指導案に位置付けることで、自立に向けて必要な支援を考え、タイミングを逃すことなく支援を行うことができた。

また、自分の力で作りきることを目標にしている子どもに対しては、支援を控える場面も指導案の中に明記した。このことで、必要以上の支援を行うことなく、子どもたちが中心となって学習活動を進めることができた。

しかし、今回の指導案ではグループごとに支援を把握することが難しかった。今後は、個への支援を明確にすると共に、グループごとに支援のあり方を把握できるような指導案を作っていく。

(2) 学び合い、高め合う授業作りの工夫

○小グループによる活動

今回のパン作りも前回までと同様、全体をチョコチップとチーズパン共同チーム・チョコチップパンチーム・メロンパンチームに分けて作業を進めた。グループ編成は、子どもたちの希望を元に教師が決めたものである。今回は、児童の中から「一人で作ってみたい。」という希望が出されたため、前回のグループにもう一つチョコチップパンチームを加えた。

前回までのパン作りでも、小グループで活動することによって子どもたちの関わりは増えていた。しかし、グループ内でのコミュニケーションは、教師や介助員を介した物が多い現状があった。今回は、子どもたちの力でパンを作りきらせることを大切に考え介助員の支援を控えていたため、子ども同士のやりとりが多くみられた。

チョコチップパンとチーズパンチームのA児とF児は材料を混ぜる作業を2人だけでやっていた。その際に、A児はF児に「卵を入れてもいい？」とボールの中に溶いた卵を入れる仕草をして見せた。それに対してF児は、先に他のものを入れる必要があったため、「待って！」と答えた。このやりとりを2回ほど繰り返し、F児が「入れて！」という、A児はボールの中に卵を入れた。このようなやりとりが、多くのグループでみられた。

しかし、作業に教師が加わっている場合には、子どもと教師とのやりとりが増え、子どもたち同士のやりとりはほとんどなくなることがわかった。

今回のA児とF児のやりとり自体は、子どもたちが学び合い高め合っているとは言いがたいが、このようなやりとりを発展させることが学び合い高め合うことにつながると考える。

子どもたち同士のやりとりが生まれた理由として、小グループでの活動であったことと、教師や介助員が支援を控えており、作業が子どもたちだけで進められていたことが考えられる。子どもたちが相互に学び合い、高め合うためには、子どもたちの力でやりきれない部分では、支援を控え、子どもたち同士のやりとりを大切にしていこう必要があると考える。

○全体で学び合う場の設定

前回のパン作りの課題として、グループ間や、全体で学び合う場を設定することができなかったことが挙げられていたが、今回のパン作りでは、たたきつける作業の際に全体で学び合う場を設定した。

E児は、前回までのパン作りでは自分の思いをグループの友だちに伝えられず、パン作り自体に意欲を持ちにくくなっていった。

E児から「一人で作ってみたい！」という思いが出されたため、一人でチョコチップパンを作らせることにした。

E児は、ほとんど一人で作業を進めることになるため、E児の作業を全体で見合った。E児がたたきつけている様子を全員で見ても、たたきつけた後に丸めることを学び合った。このことで、それまで生地をたたきつけるだけで終わっていた児童も、丸めることを意識し作業に取り組むことができた。

また、友だちの前でたたきつける作業をし、それを教師に評価されたことは、E児の自信につながり、その後も意欲を持ってパン作りに取り組むことができた。

○共通のコミュニケーション手段

メロンパンチームでは、小麦粉をふるう際に、こんな場面が見られた。ふるおうとしているG児に対してB児が手話で「合っているよ。がんばれ、がんばれ！」と、励ましているのである。このように、友だちのよさに気づき、励ましながら作業が進められたのは、共通のコミュニケーション手段である手話があったからであると考えられる。共通のコミュニケーション手段を持つことで、友だちに伝え、わかってもらえる喜びを感じていたからこそ、励ましの言葉が生まれたのであると考える。

このように、共通のコミュニケーション手段を持つことは、子どもたちが学び合い高め合う学習活動を創っていく際に大変有効であると考えられるが、それ以前に子どもたちが、伝え合いたいと思えるような雰囲気作りが大切であると考えられる。生活単元学習だけに限らず、学校生活全般で伝えたいと思う気持ちや、それを受け止める集団作りを進めていくことを大切にしていく必要がある。本学級では、伝え合う場として、朝の会の健康観察を大切にしている。確実に伝え合えるように、音声言語・手話・絵カードの3つの手段を使用している。このように、日々の生活の中で伝え合えたという経験の積み重ねが、伝えたいという気持ちやそれを受け止めようとする集団作りにつながると考える。

(3) 自己評価能力を高める工夫

授業の最後に、子どもたちとその日のパン作りの活

動を繰り返る場を設定している。前回は、活動を振り返りにくい子どもが多かったが、今回は、ほぼ全員が自分の活動を振り返り、思いを発表することができた。

B児は、「あのねー、CとGとね、パン作ったよ。」と、自分からパネルの前に歩いて行って、パネルを指さしながら「ここ作ってね、ここが終わって、こしして終わって……。」と手話を交えながらパン作りの様子を振り返ることができた。

また、これまでパン作りにあまり意欲を示しにくかったE児も、「一人で作るのをがんばりました。」と、やりきった達成感を友だちに伝えることができた。

今回、このような振り返りができたのは、2つの取り組みの成果であると考える。

一つ目は、「自分たちの力だけでパン作りをやりきる。」という目標を一人ひとりが持って、今回のパン作りへのぞんだことである。前回の振り返りでは、振り返る観点を明確に提示していなかったことが課題であった。今回は、「自分たちの力だけでパン作りをやりきる。」という目標が、振り返りの観点となった。このように、観点となる目標を一人ひとりが持つことは、振り返りをする際に大切であると考える。

二つ目は、振り返る手段として、パン作りのパネルを提示したことである。このパネルは、毎回、提示している。今回は、B児にとって、パン作りの様子を順序立てて振り返る確実な手だてとなった。

今回は、前回のパン作りに比べ、一人ひとりが自分の目標に即して活動を振り返ることができた。しかし、その振り返りが、次の活動につながる物になっていないのが現状である。今回のような充実した振り返りを重ねていくという経験を積み重ねていくことと同時に、次の活動に振り返りを生かしていけるよう取り組みを続けていく必要がある。

(4) 本単元における成果と課題

- 昨年度に引き続き、子どもたちの身近にあるパンを取り入れた単元を設定したことは、子どもたちの実態に即しており、全員が意欲的に取り組むことができた。
- 「開店！みんなのぱんぱんぱんやさん！」という本単元は、パン作りだけではなく、パンの出てくる絵本の読み聞かせに始まり、パン屋さんの帽子作り、看板作り、地域のパン屋さん探し、パン屋さんごっこなど、活動を広げることのできる単元であったため、子どもたちは常に新しい課題を持ち、主体的に活動することができた。

- 指導案の中に個に応じた支援を位置づけていくことで、自立に向けて必要な支援を吟味し、的確に支援を行うことができた。

- グループごとに支援の流れが把握できるような指導案作りをする。

- 小グループ活動に教師が入ることで、子ども同士の関わりが減少する傾向が見られた。子どもたちだけでやりきれる場面では、子ども同士の関わりを大切にしていく。

- 自己評価のあり方が、授業の最後の口頭での振り返りのみになってしまい、次の活動に生かされる物になりにくかった。

VI 成果と課題

- 本年度は、生活単元をパンに関わる単元・栽培・校外学習の3つに分けて構成していった。(資料参照)このように3つの分野に分けて生活単元学習を構成することで子どもたちの生活体験を広げることができた。

- 子どもたちの実態把握を緻密に行った上で、単元を設定したため、どの子どもも自分なりの課題を見つけ主体的に活動することができた。このような活動の中で、自ら考え、選択し、行動する意欲や態度が培われた。

- 小グループでの活動を設定したり、コミュニケーション手段を共有したりすることで子どもたち同士の関わりが広がった。

- 生活単元学習は子どもたちの学校生活そのものを単元化したものであり、個々の実態に即した内容になっているので、子どもたちのコミュニケーション能力を育成する場を設定するのに適している。ここでの関わりは、他の生活場面でも生かされ、社会参加に向けて人間関係を結び広げていく力につながる。

- 子ども同士の関わりを深める場面を指導案に位置づけ、関わりが深まるような支援をしていく。

- 様々な自己評価の方法を取り入れ、個に応じた自己評価ができるようにする。また、自己評価を後で振り返り、次の活動につなげられるように工夫する。

- 活動を絞り込むなどして、時間的に余裕を持った単元構成をする。

参考・引用文献

宮崎直男（2000）改定学習指導要領で知的障害者の教育はどう変わるかー特殊学級編ー。明治図書出版株式会社。

宮崎直男（2000）障害児教育の新展開ー障害児教育で効果的な指導案ー明治図書出版株式会社。

太田正己（2000）障害児のための授業づくりの技法

黎明書房。

生活単元学習を考える会（1989）実践 どの学級でもできる新生活単元学習，明治図書出版株式会社。

全国知的障害養護学校長会（1999）新しい教育課程と学習活動Q&A 特殊教育 知的障害教育，東洋館出版社。

神沢利子 文 林明子 絵（1978）ほくのぱん わたしのぱん 福音館書店。

	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 開店！みんなのばんばんばんやさん </div>										
生	<p>パンづくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなで作ろう！ ・いろいろなパンを作ってみよう！ ・ばんばんばんやさんの名物パンを作ろう！ ・パンづくりの準備をしよう (買い物) 										
活	<p>バン屋さんを探せ！ ばんばんばんやさんの名物パンを作ろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発見！名物パン～ ・学校の近くにあるバン屋さんを探そう ・名物パンを見つげよう！ 										
単	<p>お店を開く準備をしよう！</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バン屋さんを見に行こう！ ・バン屋さんを作ろう！ 										
元	<p>いよいよ開店みんなのばんばんばんやさん</p> <ul style="list-style-type: none"> ・招待状を書こう！ ・お世話になった人を招いてバン屋さんを開こう！ 										
学	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 畑と仲良し！野菜を育てよう </div> <ul style="list-style-type: none"> ・どんな野菜があるのかな？ ・たねものやさんに買ってみよう！ 										
習	<p>苗を植えよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・畑のお世話をしよう (水やり・草取り) ・夏野菜の収穫 										
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 畑に感謝！実りの秋 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・おイモを守ろう！ ・畑のお世話をしよう ・サツマイモの収穫 ・ホクホクおいしい焼きイモバーブー 										
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 花いっぱいになあれ </div> <ul style="list-style-type: none"> ・どんな花を育てようかな？ ・たねもの屋さんに行ってみよう！ 										
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> みんなのお楽しみ遠足 </div> <p>お楽しみ遠足の 計画を立てよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お楽しみ遠足に行こう！ ・お世話になった人にプレゼントしよう！ ・分らないことを旅行会社に聞きに行こう！ ・しおりを作ろう 										